府立学校の在り方懇話会高校教育部会（第３回）の開催概要

１　日　時　平成１２年７月２１日（金）9：30～12：00
２　場　所　京都府公館　第５会議室
３　出席者
（部会委員）１２名
（京都府教育委員会）西山教育次長、津守指導部長、松本指導部理事、福岡高校教育課長ほか

４　概要
(1) 協議
ア　自己紹介
自己紹介として、これまでの経験や日々の仕事を通して教育について感じていることや教育観について述べあった。

＜委員の発言要旨＞
・　小学校の段階で、国立や私立と、公立との一番の違いはクラスの人数である。公立においては、１学年に何人いるのか入学してみないとわからないのに対し、国立・私立は、人数がそろっている。公立においては、市内でも学校の統合によりクラス人数も多くなったが、１クラス十数人しかいないということもある。そういうところでは、子ども同士が切磋琢磨し、互いに成長するという機会が少なく、子どもたちの成長の幅が狭まってしまう。そういう理由で公立の小学校を敬遠する保護者が多いと聞いている。高校では、人数が少なすぎて学級が編制できないということはないかもしれないが、今後、生徒の数が減って来ることがわかっているのなら、そのことも考慮し、学校の適正規模を定めて学校数もある程度減らしていった方が良いのではないか。

・　宗教や思想の面で中立でなければならない公立高校という機関での道徳教育には限界があるのではないか。やはり、道徳やモラルという部分の教育は、１番には家庭であり、２番目には社会全体である。高校では、技術の習得や職業教育の充実などに、その目標を絞ることが必要だ。

・　子どもの適性にあった進路、教育が必要であるが、公立高校を考えるとき、それぞれの設置されている地域でどのような役割を持たすのか。コースやⅡ類の特色、Ⅰ類の位置付けをはっきりさせ、さらに特色化を進める必要がある。

・　教育には、基礎基本が大前提として必要である。学校教育の中で、基礎基本の学習を保障していく必要がある。また、中学校と高校が連携しながら生徒を育てていくことも大事である。

・　社会が豊かになるに伴い、子どもに我慢、辛抱をさせないことが多くなってきた。このことが、今の憂うべき状況を作り出した１つの原因になっているのではないか。現在、子どもたちに社会性、規範性を備えた自立心を付けさせたいということで、我慢、辛抱を含め相当厳しい態度で信念を持って教育にあたっているし、また、その必要があると考えている。

・　学校には幅広い生徒が入学しているが、既存の教育システムでは、幅広い生徒に適切に対応するのに限界があり、履修形態の柔軟さを持った学校も必要である。また、習熟度別の学習機会をさらに広げるなどの方策も必要である。さらには、一つの学校で全てを受け入れるのではなく、学校各々が役割分担することも必要ではないか。

・　先生そのものがサラリーマン化しているように感じる。教育者として、未来を担う子どもに対し、熱い思いで教育をするということが薄らいできているとも聞いている。教員の資質向上が必要である。

・　学校教育の中では、まず先生にやる気を起こさせるように管理職等が持っていくことが大事である。先生の熱心な指導は、生徒に刺激とやる気を与え、成果につながることになる。そのためには、学校長の裁量を拡大する必要がある。

・　物事には、集中力が大切である。例えば、年間の教育活動の中で、学校行事を休日とうまく組み合わせるなどの工夫をすることにより、学校行事に集中して取り組む時期と教科の学習に集中して取り組む時期を明確にし、生徒も教師もけじめをつけ一体となって活動する。校長を中心として学校が一体となって取り組むことは、様々な課題を解決し、成果を上げていくことにもつながると思う。

・　教育の基本は家庭である。子どもの教育は、３歳ぐらいまでに決まってしまうのではないかと思うくらいスタートラインが大事である。

・　教育においては、子どもと接し、まずは話をよく聞いてあげること、コミュニケーションを持つことが大切である。また、そのとき一方的な先入観で物事を考えてはいけないことを強く思う。また教育の中では、我慢、辛抱を教えないといけない。

・　学校は、秩序がなければ何もできない。そのためには、生徒と一線を画すことが必要である。秩序維持は、単に管理的な面ではなく、生徒に価値観をぶつけ、生徒とのぶつかり合いの中でできるものである。学校には感激と感動のある教育活動がなければならないが、その取組の成果を上げるには、前提として、授業をきちんと確立し学力を保障することが必要である。また、そうしなければ自主性・主体性も育たない。

・　競技力、スポーツ向上を支える基盤として、学校が多くの部分を抱えすぎている。この部分を、社会体育の分野でもっと担っていただいて、学校の負担を軽くしていく状況をつくっていただきたいと考える。

・　進学率が９７％ということは、幅広い生徒が入学しているということであり、幅広い子どもたちに対応する高校教育制度を考える必要がある。そのとき、一律に幅広い層で受け入れるのが良いのか、あるいは、子どもたちの進路目標に沿った受け入れ体制を整えるのが良いのかということも検討する必要があるのではないか。

・　大学生の学力低下がいわれているが、学力よりも学生が何を考えているのかわからない。「大学を卒業してどうするのか？」、「結婚は？」、「子どもは？」といった将来のビジョンを持たない学生が非常に多くなっている。

・　今の学生は、物事を抽象化して、概念化して組み立てることができない。また、文科系でありながら日本の歴史を知らない者も多い。基礎がないのにそこに建物を建てるというのが今の大学の状況である。血や肉となる基礎的な教養や学力を身につける教育が必要であるが、現在の中等教育では、この部分が上滑りをしているのではないかと危惧している。

・　モラルとか、道徳という点で、家庭の教育力、地域の教育力が落ちてきている今、やはり、学校教育の中で教えていく必要がある。歴史、文化、伝統の教育、また、偉人を学ぶ教育が、我慢、しつけ、道徳につながっていくのではないか。

・　物事、言葉の意味には、昔から基本的に変わらない内容とその時代により変わってきている部分とがある。時代を越えて価値あるものを大切にする教育と基礎基本を重視する教育には大きなつながりがあるのではないか。この懇話会は、「教育」について協議をするわけだが、教育における不易と流行をしっかり見つめる中で、教育の現状、課題をとらえ、10年後、100年後の京都府の教育像をも見据え、考えていかなければならない。

・　基礎基本に関して言えば、基礎基本を身につけさせようとするときに、社会が何でも必要なものを用意してくれているため、それが自分に必要だという実感がなく、おろそかになっている。必要性を感じないから目新しいおもしろいことに流れていっているのではないかと感じている。

・　今の社会は、個性や自主性を育てるということを言い過ぎて、そのために周りがお膳立てをしなければならないような雰囲気があり、最初からハードルを低くしてしまい、高いハードルを乗り越えさせることをさせていないのではないか。高いハードルであっても自分の力で乗り越えてこそ、本当の個性といえるではないか。

・　道徳の「道」は生きていく上で人間が歩くべき道である。その道は決して狭いものではなく、たっぷり幅のある道である。その幅がどの範囲までかを示してやるのが、学校であり、家庭であり社会である。「徳」は、中国ではもともと能力を表す言葉であり、人間としての道を歩くときの様々な能力を指す。道徳教育は、幅のあるいろんな道の歩き方があることを示すとともに、道の幅には限界があることを示してやることである。その意味では、小・中学校はもちろんのこと、高校でも道徳教育は必要であると考える。

イ　意見交換

大多数の中学生が高校へ進学している中、部会の検討項目である「個性化・多様化に対応した府立高校の在り方」を考えるとき、学科の構成やそのバランス、また個々の学科の教育内容の設定の在り方などに絞って、意見交換を行った。

＜委員の意見要旨＞

・　高校進学率が９７％にもなっている今、いろいろな面で多様な子どもたちが高校に入学しているのは事実である。また、現在の社会は、中学校卒業後に就職するのは並大抵のことではない状況であるし、希望どおりの就職はたいへん難しい。これは、高校を中途退学をした子どもたちも同様で、次の手だてがたいへん難しい状況にある。高校は、入学した生徒に対し学習を積み上げさせ、生きる力を付けた上で卒業させていくということを基本にしてほしい。そのために、どのようなシステムを作るべきかを考えてほしい。その一つのシステムとして総合学科が有効ではないかという気がしている。

・　知的探究心が非常に強い生徒に対して、応えられるシステムも必要である。中高一貫教育は、受験校になってはいけないということであるが、受験校ではなく、リーダー育成をしていく学校としてとらえられないか。通学園に１校ぐらい設置し、リーダー教育というか、知・徳・体の総合的な能力を育成する位置付けの学校にできないか。

・　自分に必要ないものを学ばなければならない学校へ入学して、やる気が起こるようなことはない。高い進学率と生き方が多様化する中では、自分にふさわしい学びの場があることがやる気につながる。そういう意味で、現在の学科構成の在り方を思い切ってかえる必要があるということについては、異論がないのではないか。

・　高校での選択科目の幅を広げていくとしても、様々な条件が必要であり、増やす一方とはならない。そこで、学校外での学修を単位認定していくことも考えられる。何でもかんでも単位認定することが良いとは思わないが、例えば、新しく設定される教科「情報」、「福祉」などは、学校の枠から少し広げたところでの学習もしていく必要があるのではないか。

・　学校教育では、生徒が教師から知識を授かることと同じくらい、異年齢の子どもたちが影響しあいながら育っていくという環境が大事である。生徒数が減り、教室が空く、また、現在の教員数をどうしていくのかと考えるとき、中学校、高校という枠組みから離れ、中学校と高校を一つの建物で考える中高一貫教育も思い切って考えても良いのではないか。

・　これまでは、平等を基本にして教育をするというのが底流にあった。それは間違ってはいないが、平等教育が生徒の能力・個性を尊重した上での真の意味の平等教育になっていたのかを考える必要がある。

　多様な生徒が入学している状況の中では、学力にとどまらずそれぞれの能力の差は、相当違いが出てくると思う。それぞれの能力に適した学習の場を用意し、伸びる部分を伸ばしていく教育をすることが大切である。こういう話は、これまで議論しにくかった面もあるが、今はすべき時期であるし、もう少し実態にあう教育をしていかないと不幸な人間が出てくることになると思う。

・　能力に適した教育を行うということが議論しにくかった大きな理由は、リーダー的な人材を養成する仕組みを作っても、それを自分のことにしか使わない人ばかり出てきてしまっていたことが問題なのであって、しかるべき高い能力の人は、社会で最大限活躍してもらって、また違う能力を持っている人が、その立場で最大限活躍していただく。教育の成果を自分のみに使うことが問題であるということさえ押さえておけば、多様なものを多様な形で身につけ、身につけたものを一番優れた形で社会に還元していくシステムができさえすれば、いろんな教育があって良いと考える。

・　会社の採用は全体として厳しい状況にあるが、その中でも最近は、情報処理を専門に学習した高校生を取りたいという会社が多いと聞いている。情報科等での対応が、いま高校に対して求められている。